
Installer **-捧げられし者-**

久郎太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Installer - 捧げられし者 -

【Nコード】

N5251L

【作者名】

久郎太

【あらすじ】

異世界に召喚された少女とその少女を愛した青年の悲しくも短い物語

召喚 - S u m m o n s - (前書き)

基本一人称で書いてあります

突然、加筆修正いたしますのでご了承ください

召喚 - Summons -

世界にはこんなに人があふれているのに

私はこの世にたった一人
血縁者は一人もいない
親しい友人も知人もいない

天涯 孤独

淋しいよ

ひとりはとても寂しい

呼びかける声に
応えてくれる人はない

誰にも必要とされていない

でも

誰かに必要とされたい

誰か

誰かお願い

私を見て

私を見つけて

私の声を聞いて

私の声に応えて

私が必要だと言って

どんなに思い悩んでも

どんなに求めても

この現実には

この日常は変わらない

変わることがない

私が

私自身の手で

自分の世界を切り開くか

自分の世界を壊すしか

変わることはない

ミ
ツ
ケ
タ

蝉が鳴き、遮るものなく燦々と照りつける太陽がまぶしい季節
変わることがないはずの日常が
壊れることがないはずの世界が

変化した

その日、私と言う存在が、地球という星から消えた
……

接 触 - Contact - (前書き)

【主人公 視点】

展開が早いですので注意してください

基本一人称で書いてあります

突然、加筆修正いたしますのでご了承ください

接 触 - Contact -

目の前に広がっていたのはとても綺麗な風景

気付いた時には見たこともない場所に立っていた。
空を見上げるとそこにはどこまでも澄み切った蒼い空が広がって
いた。

私の黒い髪を揺らす風は温かく優しい。

足元には柔らかかそうな丈の短い草が揺れている。

とても 綺麗で 静かで 温かい

汚れた大気でくすんだ空も

コンクリートのビルも

息がつまりそうな大勢の人も

今まで見慣れたものが一切ない

あるのは

蒼い空と 青い大地

私は今、地球ではない別の場所に居る

漠然とそう思った。

けれど、あまりにも突然のことで思考回路が停止してそれ以上何も考えられない。

だから

ただ、目の前美しい景色を眺めていた。

「お前、そんなとこに突っ立って何してんだ？」

その声で我に返った時、私の目の前に見上げるほど背の高い男の人が立っていた。

黒い髪の毛に、ローズウッド紫檀色の瞳

とても厳つく鋭い目つきをした人だけでも、その瞳はとても、とても優しい光を宿していた。

いきなり呼びかけられたのに不思議と怖くなかった。

だから名前を聞かれても警戒することもなく自然に自分の名を彼に教えた。

とても安心する

それが、彼の第一印象。

彼は、地駒族ちこまぞくの黒狼炎こくろろうえんと名乗った。

見た目は日本人ばいけれどやっぱりどこことなく顔立ちや骨格が違
がう気がする。

名前を名乗りあった後、会話もなく私はじっと彼を見つめていた。
気まづくなることもなかったただ彼を見つめていた。
すると突然、唇に柔らかい感触を感じた。

キスされた？

驚いて瞬きしていると、

「決めた！ お前俺の伴侶になれ」

突然、満面の笑顔で彼はそう私フロボースに求婚した。

恋心 - Love - (前書き)

【狼炎 視点】

展開が速いので注意してください

基本一人称で書いてあります

突然、加筆修正いたしますのでご了承ください

恋心 - Love -

はつきり言つて一目惚れだった

長く艶やかな黒い髪の毛がそよ風に揺れている。
衣服から出る肌は、象牙色で肌理が細かくとても滑らかそうだ。

ただそこに立っているだけなのに気付いたら目が離せなくなっていた

長年、対立していた天翔族てんしゅうぞくとの戦いにようやく終局が見えてきた
今日この頃。

非戦闘区域である永世中立区から自分の住む部落に戻る途中、俺はその娘こと出会った。

街道から少し離れた草原の中で、ぽつんと一人で立っていた彼女。何もするでもなく、ただ立っていた。

いつもの俺なら気にすることもなく立ち去っていたはずなのに、何故か足が止まった。

暫く、彼女を見つめていた。

ただ、その後ろ姿を見つめていた。

それだけなのに何故かホッとするような落ち着くような安らぎを

覚える。

何なんだ？

言葉にしようもない、不可思議な感覚。

しばらくして、彼女の顔を無性に見てみたくなった。

だから、声をかけてから、彼女の目の前に立った。

視線を合わせるためにかなり見下ろさなければならぬほど、彼女は小柄だった。

俺の声で我に返ったのか、彼女が顔をあげた。

彼女の瞳の色は黒檀色^{エボニー}

その瞳にしつかり俺が映っているのが見える。

俺を見上げる彼女の肌の色は想像していた通り、象牙色でとても肌理が細かく滑らか。

名前を聞けば、警戒する風でもなくごく普通に『オウサカ ユウ』と名乗った。

聞きなれない名前。

地駒族^{ちこまぞく}では、まず聞いたことのない氏名^{うじな}。

天翔族の者でも無いだろう。

とても不思議な少女

互いに名乗りあったあと会話もなくただ見つめあった。

彼女は、その視線をそらすことなくまっすぐ俺を見つめくる。

その澄みきった瞳に俺を映している。

こんなにまじまじと見つめられたのは初めてだった。

自分で言うのもなんだが、俺はかなり強面だ。

目つきもあまり良い方ではない。

故に、今まで俺とまともに視線を合わせる者がほとんどいなかった。

居ても、親父がお袋のどちらかだ。

だから、こんなに見つめられたは初めてで、妙に心臓がどきどきした。

彼女の顔の造作はいたって普通。

とりわけ美人でもなんでもない。

自分の好みでは、無いはず。

でも、目が離せない。

とても愛おしさを覚える。

この娘こがほしい

そう思った瞬間、気付いたら彼女に接吻キスをして

プロポーズ
求婚プロポーズしていた

約束 - Promise - (前書き)

【逢坂 悠(主人公)視点】

展開が速いので注意してください

基本一人称で書いてあります

突然、加筆修正いたしますのでご了承ください

約束 - Promise -

プロミス
約束

必ず幸せにする

だから、死が二人を分かつまで俺と共に

突然で

戸惑って

困惑して

混乱して

でも

うれしかった。

とても、うれしかった。

初めて私を必要としてくれた人

初めて私を求めてくれた人

だから彼の求婚を受けた。

さつき会ったばかりの人なのに
常識ではありえないのに

でも

彼から視線を離せなかったから
彼と離れることを想像して胸が締め付けられるほど痛んだから

約束

ずっと一緒に居てね
その手を離さないでね

- ああ、約束だ

そう言って、彼は壊れ物を扱うようにそつと私を抱きしめた。
彼の温もりが、私の中にあつた寂しさを消してくれた。

- 俺は、永遠にお前のものだ

- お前は、永遠に俺のもの

耳元で囁いてくれた愛の言葉が、私を孤独から救ってくれた。
疲弊していた私の心を癒してくれた。

ああ、そうか

私は、彼に会つたためにこの世界に来たんだ。^{ロウエン}

この時、私はそう思った。

彼とめぐり合うために世界を越えてきたんだ、と。

けれど

それは、大きな誤りだった
……

拉致 - Abduction - (前書き)

【主人公 視点】

展開が速いので注意してください

基本一人称で書いてあります

突然、加筆修正いたしますのでご了承ください

拉致 - Abduction -

それは、突然だった

確かに繋いでいたはずの手は解かれ

確かに感じていた彼の温もりが一瞬で消えた

気付いた時には薄暗い石壁の部屋に私は立っていた。

ここは、とても寒い場所。

窓が小さく、光が部屋を照らすことが無い。

部屋を見回すと、私の目の前に値踏みするような冷たい目をした人々が私を見下ろしていた。

「一時は、召喚したが見失った故に焦ったが、これで何とかなるな」

「しかし、こんな貧相な娘が本当に召喚した天魁星てんかいせいの操者インストラなのか？」

「どうせ、動かすのは我等なのだから問題なかつ」

「精々、役に立ってもらおう」

「こんな地駒族さこまぞくの様な髪色なら、良心も痛まないしな」

とても 冷たい言葉

その言葉が、怖い

とても 蔑んだ声

その声が、怖い

狼炎と違ってこの人たちはとても怖いと感じる。

出来るのなら、関わりたくない。

こんな所に居たくない、ここから逃げ出したい。

でも、私の目の前にある鉄柵がそれを阻んでいる。

なにがどうなっているの？

狼炎はどこにいったの？

召喚って何？

私をここに呼んだのは、この人たちだったの？

じゃ、さっきまでの事は夢？

狼炎は、夢の中の人だったの？

実際は実在していない人だったの？

私は、都合のいい夢を見ていたの？

尽きない疑問。

湧水のように、次から次に沸いてくる。

それと同時に、不安がだんだん大きくなってくる。

でも

あの温もりは本物だった。

あの感触は本物だった。

わからない

わからないよ

ろ、うえん ……

ロウエン、狼炎！

怖いよ

怖くて、不安で、壊れそう ……

狼炎、助けて！

助けて！！

接 続 - Link - (前書き)

【 主人公(逢坂 悠) 視点 】

展開が速いので注意してください

基本一人称で書いてあります

突然、加筆修正いたしますのでご了承ください

言つなれば

金と白で装飾された巨大な鎧

それは

曇りのない金属の様な光沢を放ち

恐ろしく美しい姿をして

私の目の前に佇んでいた

石牢から出された私はその巨像の前に引き出された。

その巨像の前に来るまでの間、私の前後左右に武装した人が立ち
後ろの二人は私の背中に随時槍を突き付けていた。

無言でその巨像の前の床に描かれた何か魔法陣の様なものの上に
強制的に追いやられる。

私はその中央に立った瞬間それは、光り出した。

あまりの光量に一瞬眩暈がするほど。

眩しくて目を閉じた。

まぶたに光を感じなくなった頃、恐る恐る目を開けた。けれど、その時にはすでに見知らぬ場所に立っていた。

狭い空間

そう感じられるのは周りが闇に同化しているから。

足元には先ほど床書かれていた魔法陣と同じものが書かれており薄らと青白く光っていた。

それが、この空間での唯一の光源。

戸惑いつつも状況を把握しようともう一度あたりを見回して気付いた。

私の両手はどういう仕組みかわからないけれど浮いた、丸い石の上に置かれていた。

良く見るとその石にも床と同じ魔法陣が描かれている。

そこから手を離そうとしたのだけでも何故か離れない。

そのことに戸惑っていると、ヴウウンツと、言う音と共に暗かった周囲に様々な色の光が灯り明滅を繰り返し始めた。

同時悪寒が全身に走り 形容が出来ないほど気持ち悪い事が身に起こった。

強いて言うならば 頭の中に勝手に色んな映像がいつぺんに流れ込んでくる感じだ。

それがとどまることなく私に入ってきては流れてゆく。

気持ち悪くて蹲りたいのに蹲ることが出来ない。

どうなっちゃうんだろう

これから何が起きるんだろう

怖いよ

恐怖心から涙が出る。
がくがくと膝が震えるけれど、やはり今の体勢が崩れることは無かった。

ふと、気がつくといつの間にか目の前に映像が浮かんでいた。
どうやら外の風景らしい。

荒涼とした荒れ地。

乾いた土がむき出しの一片の緑が無い不毛な地が地平線まで続いていた。

どこどこ？

とてもさびしい場所。

生命の息吹が感じられない場所。

良く目を凝らすと地平線に黒い物体が無数見えた。

色は違えど姿かたちは、あの白い鎧の巨像に似ていた。

白い巨像 否

天の巨兵機

天星将 天魁星

私の考えたことを否定するように、知らない記憶が頭に浮かぶ。

黒の巨像 否

地の巨兵機

地星将 五機

星将

十三機

確認

誤った情報が正され 掛けた情報が上書きされるように。
私の中を流れていく情報。

先手必勝 攻撃開始 敵機殲滅

私に、情報を与えてくれたモノとは明らかに違う不快を起こすよ
うな命令。

その好戦的な情報が私の中を通り過ぎた瞬間。
何かが私から抜けていき、一気に虚脱感が襲った。

それと同時に、目の前の風景がありえないほどの速さで流れて行
く。

虚脱感に加え眩暈までおこりそれに耐えおさまった頃、ふと、目
の前のモニターのが目に入った。

目の前の光景が信じられなくて目を見張る。

周りは火の海と化し、残骸となった無数の地の巨兵機がそこかし
こにあった。

悲鳴 - S c r e a m - (前書き)

【主人公(逢坂 悠) 視点】

展開が速いので注意してください

基本一人称で書いてあります

突然、加筆修正いたしますのでご了承ください

悲鳴 - S c r e a m -

時間にしてほんの2、3回瞬きする間

その短い時間で地に倒れ伏し、火達磨と化してた敵の星将と残骸と化す地星将。

先ほどからやけに胸が苦しく意識も朦朧とする。

私はいつまでここにいなければならないのだろうか？

だんだん辺りがぼやけ、曖昧になっていく。
なにも、考えられなくなっていく。

ふと、気づいたらその一体の地星将が私の前に立ちはだかつていた。

黒く美しい機体

天魁星と真逆の色合い。

光沢を放つ漆黒と日に反射する金が施された黒き鎧。

地の最強巨兵機

地星将

地魁星

天魁星が自動的に敵の機体を識別して直接私の脳にそう情報を送り込んできた。

ー えっ？

その操縦者の情報と映像も。
その姿は……

ー 狼炎？
ろっえん

ー ユウ？

彼が私の名を呼んだ声が聞こえた気がしたのは気のせいだったのだろうか？

なんで？

どうして狼炎が、地魁星の操縦席にいるの？

どうして どうしてそこに居るの？

地魁星の操縦者であり操縦者インストラクタが、狼炎パイロットだったなんて！！

どうして？ どうして！？

何で？ 何で？！

その問いに応えてくれるものはいない。
そればかりか、私の意思関係なく動かされる天魁星。

戦いたくない！ 戦いたくないよお！！

嫌だ！ 嫌だ！！ 嫌だ！！

止めて！ 止めて！！ 止めて！！！！

私を支配しないで！！

いくら泣き叫んでも、天魁星の動きは止められない。
止まらない。

私は、天魁星てんかいせの起動回路の一部。
頭の中を流れてゆく情報が物語る。

私が疑問に思う事に応えるように、修正するように情報が更新されていく。

私は、天魁星を動かすための動力源エネルギーであり操者

私は、操者であって操縦者ではない。

私の意思で天魁星を動かすことなんてできない。
そもそも動かし方なんて知らない。

何の説明もないうちに天魁星に押し込められた。

彼らは、初めから私を天魁星の動力源と外部からの命令を橋渡し

するだけの為に私を載せた。

今の私は天魁星の一部パートでしかない。

嫌だ、ここから出して！

そう叫びたいのに、もう、叫ぶ力さえ残っていない。

助けて、狼炎

助けてえ！！

狼炎！！！！

決戦 - Final battle - (前書き)

【狼炎 視点】

展開が速いので注意してください

基本一人称で書いてあります

突然、加筆修正いたしますのでご了承ください

決戦 - Final battle -

俺の目の前で突然悪夢が広がった

勝利が目の前だったはずだ。

けれど

俺の目の前には炎を纏い残骸と化した十三体の星将せいしょうと二体の地星ちせい将しょう。

本当に一瞬のことだった。

その白く輝く機体が戦場に降臨した直後。

圧倒的な速度スピードと力パワーで巨兵機の操縦席が無残にも押しつぶされて行った。

操縦者パイロットが脱出する間もなく巨兵機は沈黙していった。

この時俺は、その神々しくも禍々しい白い機体に魅入られ動けなくなっていた。

怖いくらいに、美しい白い巨兵機。

いや、あれはただの巨兵機ではない。

地魁星が、俺の脳に俺の知りたい情報を直接を送り込んでくる。

天翔族に伝わる最強の天星将てんせいしょう 天魁星てんかいせい

その残酷な起動条件故に禁忌の機体として封印されていたはずの最強にして最悪の天星将。

俺がそう思考している僅かな間だった。たった、それだけの間に俺以外の残っていた地星将までもが地に倒れ伏していた。

全ての情報を受け取る前に外部で起こった爆発で、地魁星との情報の接続リンクが切れた。

我に返り、気がつけば今、この戦場に立っているのは俺の地魁星と目の前の天魁星のみ。

俺は今まで、地魁星の操縦者パイロットとして操者インストラとして戦場に立ちただ一度も戦慄したことなど無かった。

それが、どうだ

今、俺は目の前に立つ白い機体に恐怖を覚え操縦桿を握る手の震えが止まらない。

喉が異常に渴き、冷や汗が頬を伝う。

どのくらい対峙していたのだろうか。

時間にして数分だったような一瞬だったような。

気付けば 天魁星の動きが止まっていた。

- 狼炎？

その声は唐突だった。

こんな戦場で聞くはずもない彼女の声。

ー ユウ？

反射的に呼んだ生涯の伴侶にと望んだ、愛する彼女の名。

あの時目の前で、天翔族に攫われたはずの彼女の声がこんな所で聞こえるはずがない。

聞こえるはずがないのに。

聞こえてくる。

声なき声。

デジタルスペース

電脳空間に響き渡る、彼女の悲鳴。

ユウ、何故？

何故お前がそこにいる？

何故？！

何故、敵の天魁星の操縦席に居る？！

！！

嫌な予感が脳裏をかすめた。

まさか！

まさか天翔族^{あじつば}、彼女を動力源^{エネルギー}にしゃがったのか！？

聞こえてくるのは、助けを求める身を引き裂かれる様な、悲痛な叫び声。

胸を締め付けられるほど悲壮な声で俺に助けを求める声。

その助けを求める声と裏腹にいきなり攻撃を仕掛けてくる天魁星。間一髪で交わし致命傷は避けたが左腕を持っていかれた。

目にもとまらないほど速い天魁星の攻撃。

地魁星での運動性能、反射性能でなければとても交わせるものではない。

俺は、地魁星を半自動操縦に切り替えた。

積極的に攻撃は出来ないが防御するには耐えられるだろう。

それに、攻撃されれば反射的によけ、タイミングが合えばカウンターを仕掛けるだろう。

その間に俺は、天魁星に外部から回路侵入^{ハッキング}するため意識を電腦空間に侵入^{ロケイン}させる。

入った瞬間、俺以外にも外部から侵入している形跡を見つけた。

外部接続された部分は防御壁回路外だった為、怒りにまかせて問答無用で強制切断^{シャットダウン}させる。

外間接続していた奴は、強制切断されてただではすまないはずだが、知ったことない。

ユウの味わった苦しみを少しでも味わいやがれ！

と、そう思った瞬間、ものすごい衝撃で一気に電腦空間から締め出された。

意識を現実に戻すと、操縦席の周辺はショートし火花が散っていた。

どうやら操縦席を保護する装甲に打撃を受けたようだ。

流石に天魁星も地魁星の装甲を一撃で破壊出来なかったようだ。

幸い俺自身に大した怪我はない。

あつても衝撃の時掛けた内壁の欠片で出来た切り傷だけだ。

外部映像を見ると天魁星の装甲が大きく歪んで火花を散らせているのが見えた。

ピクリとも動かなくなった天魁星。

血の気が引いた。

俺は焦った。

焦りつつももう一度、電脳空間に意識を侵入させる。

今度は、悠と天魁星との接続を外部から強制切断シャットダウンするために。

そのためには、嚴重な防御壁回路を攻略していかなければならない。

今の天魁星の状態を見ると一刻の猶予もない。

早くしなければ色んな意味で悠の命が危ない。

待っている、ユウ！

俺が必ず、助けるから！！

決戦 - Final battle - (後書き)

【注意】この先の展開が二分岐されています

ハッピーエンドを希望する方はこのまま次話のお進みください
アンハッピーエンドを希望される方次話を飛ばしてください

い

削除 - Uninstall - (前書き)

展開分岐その壱

アンハッピーエンドの展開をお望みの方はこの話を飛ばして次話
にお進みください

削除 - Uninstall -

天魁星てんかいせいの回路は、複雑怪奇だった

狼炎は、焦せっていた。

防御壁回路セキユリテイを攻略しながら悠と天魁星の接続を強制切断シャットダウンできない事に気づく。

下手に強制切断などしたら悠の命が危うくなる。

残る手段は、消去デリートか、削除アンインストールの二つに一つ。

そのどちらかを起動させるためにも、今は目的の場所へ行くために防御壁回路を最速で攻略していかなければならない。

狼炎は焦る気持ちを落ち着けながら、複雑な防御壁回路を攻略しつつ悠と天魁星を切断するための新しい指令書プログラムを組んでゆく。

あと一階層で、全てを把握できるところまで来た時だった。

「も……、なに……みえ、……いや……。ろ、う……え……あ、えて……しあ、わせ……た、よ」

電腦空間に響く悠のくぐもった途切れ途切れの声。

泣きそうな、切ない声。

最後の防御壁回路が消えたとき狼炎の目の前に悠の姿があった。

実態の無いお互いの姿を模した映像だけの電腦空間デジタルスペースでの一瞬の邂逅。

「ロウエン、アリガト」

泣き笑いのような儂い笑顔を浮かべた悠が、電子音的な声ですうつばやくとその姿が霧散するように一瞬で消え失せた。

「間に合ええ!!! 間に合ってくれ!!!」
狼炎の絶叫が、電腦空間に響き渡った。

I U n i n s t a l l 承認 S y s t e m 完全停止 回路
切断 L i n k O u t

破損し火花散る操縦席で、狼炎は今にも途切れそうな朦朧とした意識のなか確かにその音声を聞いた。

耳障りな駆動音が消えてゆく。

悠と天魁星の接続が切れてゆくのがそれでわかる。

狼炎は、地魁星との接続を一時的に切ると操縦席から飛び出し天魁星に飛び移った。

破損して熱を持つ胸部装甲の隙間に手を入れ、手が焼けるのも構わず力任せにこじ開けた。

むっとするような熱気と血のにおい。

そこに悠はいた。

全身を血まみれにして、顔を蒼白に染めて。

しかし、悠の胸は微かだが確かに動いていた。

「ああ、ユウ……、ユウ、ユウ! ユウウ!!!」

狼炎は、操縦席から悠を抱きあげその耳元で何度も彼女の名を呼んだ。

「……え……ん」

その微かな吐息のような声を狼炎は確かに聞いた。

「……ユ、ウ?」

抱いた腕を少し緩めて悠の顔を覗けば固く閉ざされていた瞳が薄

らと開いていた。

開かれた悠の瞳に狼炎の姿がたしかに映っていた。

「天地神よ感謝する」

狼炎は、そう小さな声でこの地の創造神に感謝の祈りをささげた。

彼は悠を抱いて天魁星から外に出るとそのまま地魁星の操縦席に戻った。

操縦席におさまると目を閉じ一時的に切っていた接続をつなぎ直し地魁星に、指示を出す。

・ 承認 全回路解放 自爆迄百二十秒

地魁星が、電子音声でそう狼炎が下した指示を復唱した。

操縦席で、脱出を促す警告灯が赤く点滅し始める。

残っている右手で地魁星の操縦桿を操作し操者の居ない天魁星を抱きよせた。

狼炎はもう一度悠を抱きなおすと地魁星の操縦席から飛び降り、そのまま全速力で二機から遠ざかった。

障壁となりえる大きな岩の陰に彼が飛び込んだ時、後方で大爆発が起きた。

「ユウ、もう俺達を縛る柵しがらみは何もない。 生きる時も死ぬ時も共に

愛おしいそうに悠の頬を撫で、彼女の唇に自分の唇を会わせて狼

炎はそうつぶやいた。

この日、この世から巨兵機と呼ばれる兵器は全て消え去った。

削除 - Uninstall - (後書き)

次話は、展開分岐その弐の話になりますので次話を飛ばして最終話にお進みください

消去 - Deletion - (前書き)

この話は、展開分岐その式になります
ハッピーエンドの展開をお望みの方はひとつ前にお戻りください

消去 - Deletion -

天魁星てんかいせいの回路は、複雑怪奇だった

狼炎は、焦せっていた。
防御壁回路セキユリテイを攻略しながら悠と天魁星の接続を強制切断シャットダウンできない事に気づく。

下手に強制切断などしたら悠の命が危うくなる。
残る手段は、消去デリートか、削除アンインストールの二つに一つ。

そのどちらかを起動させるためにも、今は目的の場所へ行くために防御壁回路を最速で攻略していかなければならない。

狼炎は焦る気持ちを落ち着けながら、複雑な防御壁回路を攻略しつつ悠と天魁星を切断するための新しい指令書プログラムを組んでゆく。
あと一階層で、全てを把握できるところまで来た時だった。

「も……、なに……みえ、……いや……。ろ、う……え……あ、えて……しあ、わせ……た、よ」

電腦空間に響く悠のくぐもった途切れ途切れの声。
泣きそうな、切ない声。

最後の防御壁回路が消えたとき狼炎の目の前に悠の姿があった。
実態の無いお互いの姿を模した映像だけの電腦空間での一瞬の邂逅。

「ロウエン、アリガト」

泣き笑いのような儂い笑顔を浮かべた悠が、電子音的な声ですうつばやくとその姿が霧散するように一瞬で消え失せた。

「間に合ええ!!! 間に合ってくれ!!!」
狼炎の絶叫が、電脳空間に響き渡った。

I Deletion 承認 System 完全停止 回路切
断 Link Out

破損し火花散る操縦席で、狼炎は今にも途切れそうな朦朧とした意識のなか確かにその音声を聞いた。

耳障りな駆動音が消えてゆく。

悠と天魁星の接続が切れてゆくのがそれでわかる。

狼炎は、地魁星との接続を一時的に切ると操縦席から飛び出し天魁星に飛び移った。

破損して熱を持つ胸部装甲の隙間に手を入れ、手が焼けるのも構わず力任せにこじ開けた。

むっとするような熱気と血のにおい。

そこに悠はいた。

全身を血まみれにして、顔面を蒼白に染めて。

けれど、その顔の表情は不思議とほほ笑みを浮かべているように見えた。

狼炎は震える手で悠の頬に触れた。

その表面はすでに生者の温かみを失っていた。

「……っ!!!」

自身が血濡れることも構わず狼炎はそっと悠を操縦席から抱きあ

げた。

弛緩した手足が力なく垂れ下がる。

命の鼓動はすでにしない。

「ユウ、怖かったよな？ 痛かったよな？ ……すまない。ゆるしてくれ、もっと早く俺が……」

それ以上声にならなく、ただ静かに頬に涙が伝った。

狼炎はそつと悠を抱きしめると彼女を抱いたまま地魁星の操縦席に戻った。

操縦席におさまると目を閉じ地魁星に、指示を出す。

・ 承認 全回路解放 自爆迄百二十秒

操縦席で、脱出を促す警告灯が赤く点滅する。

空いている右手で地魁星の操縦桿を操作し操者の居ない天魁星を抱きよせた。

「ユウ……お前を一人では逝かせない。俺も共に ……」

冷たくなった悠の唇に自分の唇を重ねて狼炎はそうつぶやいた。

この日、この世から巨兵機と呼ばれる兵器は全て消え去った。

消去 - Deletion - (後書き)

次話で最終話となります

終焉 - The end - (前書き)

最終話となります

終焉 - The end -

天を焦がす勢いで起こった爆発の後、その戦場にあつた星将、地星将は修復不可能なほど粉々となり鉄くずとなり果てた。

また、その爆発は天変地異の引き金となった。

大地に亀裂が走り、それは瞬く間に広がりまるで地殻変動があつたように大陸を分断した。

鉄くずと化した巨兵機は、一体残らずその割れ目に飲み込まれていった。

それはまるで天翔族と地駒族を分けるように地に空を飛ばなければ越せないほどの幅と底の見えないほど深い溝を穿った。

これを境に、天翔族と地駒族との接触は一切なくなり、それに伴い二族間の争いも終局迎えた。

それから、数百年後

文明が進み、空を飛ぶ乗り物が開発される頃、二族間は真の和解を迎えることになる。

偶然か、必然か。

強制的ではあるが、両族を和解に導いた大陸分断。

それを起因した爆発については歴史書では語られていない。

あの最後の戦いで何が起こったのかは歴史の闇の中。

しかし、和解からさらに数百年の時がたった後。

一人の地駒族の学者が、小さな古本屋で見慣れぬ文字で記された古文書を発見した。

長年の研究の末、解読に成功したのだ。

その古文書は、闇に沈んでいた真実を明確に記していた。

歴史に埋もれていた真実が明るみになることになる。

それは、召喚された異世界の少女と地駒族の若き青年の悲しくも
短い物語

了

終焉 - The end - (後書き)

ここまで読んでくださりありがとうございました！

勢いで一気に全話書ききりました。

最終前にどうしても捨てきれずに2展開分岐させてしまいました(滝汗

読みづらいですがどうかご了承ください。

この話は、もともと「紡ぎ唄のように」を執筆中に聞いていたアインストール(b y・ぼくらのOP)に感化され、浮かんだ物語です。

なので設定がとつても甘くまた文章も非常に粗いく、なおかつ展開急で強引です。でもどうしても没にしたくなかったので思い切って投稿してしまいました(滝汗

番外編を書くかもしれませんがそれは別に投稿する予定です。

2010/06/11 全話加筆修正終了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5251/>

Installer -捧げられし者-

2010年10月10日15時41分発行